

チームスポーツ系運動部におけるモラルの縦断的研究

A Study on Vertical Section-research of the Team Morale in the College Sports

池田 瑠里¹⁾ 高橋 和之²⁾ 大門 芳行³⁾
柴田 雅貴⁴⁾ 湯澤 芳貴⁵⁾ 畑 攻⁶⁾
Ruri IKEDA, Kazuyuki TAKAHASHI, Yoshiyuki DAIMON,
Masaki SHIBATA, Yoshitaka YUZAWA and Osamu HATA

Abstract

The Sport Team aims at winning. Many approaches from the management about Sports Team are performed, and the importance of functions, such as morale and leadership, is pointed out. However, approach with those researches “across boundaries” was main. So, “vertical section-approach” was specially used in this study.

This study employed specially designed questionnaire, which were consisted of demographics (academic year, skill level, and influenced level of their leaders), object (team and individual), and morale. The sample population included members for athletic team A and B in Japan Women's College of Physical Education. Factor analysis and Anova.

The obtained data was analyzed through and the following results were obtained.

1. When time passed, the morale factor score changed.
2. Morale factor also changes with change of a team situation.

keywords : College Sports Team, Morale, Vertical section-approach

I. 研究の背景・目的

数ある組織の中で、われわれにとって最も身近な組織はスポーツ場面における「競技スポーツ集団」である。大学、特に体育大学におけるスポーツ集団（つまり運動部）は、勝つことを目的とする典型的な競技スポーツ集団である。この競技スポーツ集団には、個人スポーツ・集団スポーツなど様々なかたちで競技に関わる集団が含まれており、科学理論に基づく合理的なトレーニング・技術練習によってより高度な身体能力や技術を身に付け、総合的な競技力を向上させることを目的としている。競技活動の中心となる競技力は、一般に運動学やコーチ学において『体力+技術+戦術+知的・精神的能力+ α 』に要約される（加藤：1998）⁸⁾。

全ての競技スポーツ集団のリーダーがチームの目標

を実現し結果を望んでいる一方、集団活動や運営を効果的に進めるためには高いモラルを維持することが必要とされている。この集団が前提であり、モラルとは、『明確に設定された目標があり、集団成員が、その目標に積極的意義を感じ、その達成の可能性を信じて、集団活動が協力的、効果的に進められるような状態あるいは特徴』（心理学事典：1977）¹²⁾と定義されており、個人のやる気を示すモチベーションとは区別されている。

競技スポーツ集団のモラルに着目した研究は、競技的運動クラブにおけるモラルを媒介としてとらえ、監督の機能・競技成績とモラルの高低がどのような関係にあるかを検討した藤田（1980, 1981）³⁾⁴⁾によってすすめられた経緯がある。ここ数年では、競技スポーツにふさわしい、対象集団に適合する機能の個別性が検討されており、リーダーシップ行動と部員の満足度に関する Chelladurai（1993）²⁾の研究をはじめ、スポーツ集団に固有な部員のモラルやマチュリティとの関係を検討した鶴山ら（1996）¹⁹⁾の研究、大学女子陸上競技部のリーダーシップ行動を具体化した杉山（1999）¹⁴⁾の研究、運動部の状況に適合する、より実践的

1) 日本女子体育大学（教務補助員）
2) 日本女子体育大学（教授）
3) 日本女子体育大学（教授）
4) 日本女子体育大学（講師）
5) 日本女子体育大学（講師）
6) 日本女子体育大学（教授）

なりリーダーシップの内容とその構造を明らかにした畑ら (2003)⁵⁾の研究へと発展している。これらの先行研究は「横断的な」研究が主流であり、一般論を越えてスポーツ集団に適合するリーダーシップのあり方、状況に応じたリーダーシップの必要性を示している。

しかし競技スポーツ集団とは、ある目標に向かってチームを作り上げ、シーズンを戦い抜くという基本的な性格があり、再び次のシーズンに向けて昨シーズンの経験を踏まえた上で新たな目標を設定し、チームを形成していくものである。つまり一定の状態で留まっている集団ではなく、常にまわりの状況やメンバーが変化するとともに、成長し続けていく集団であることに注目することも重要となる。すなわち、競技力向上のために知的・精神的能力の状況と推移、リーダーの働きかけと部員の反応、マネジメントのあり方の検討が求められている。

そこで本研究では、常に変わり行く競技スポーツ集団を対象に、時間の経過、チーム状況の変化にともなうモラルの変容、流動性を明らかにし、組織的・人間的な状況を踏まえた「総合的なチームマネジメント」の基礎的な検討を行うことを目的とする。

II. 研究の方法

1. 基本的アプローチ

これまでの競技スポーツ集団へのマネジメント分野からのアプローチは、複数の集団や部内小集団、役割ごとの比較といった選手特性による「横断的な」アプローチが主流であった。しかし近年では、スポーツ集団の特性を重視した固有性・個別性の検討が必要な段階にきていると考えられ、特性の異なる競技スポーツ集団のモラル機能が時間の経過の中でどのように変容していくかを明らかにする必要があるものと考えられる。

そこで本研究では、2つの伝統的なチームスポーツ系運動部に焦点を当て、この2つの運動部の「選手特性」に加え、対象集団を取り巻く成績・戦績、目標、スタッフといった「チーム状況」を踏まえ、部員のモラルがシーズン（関東リーグ戦や全日本インカレ）を通してどのように変容していくのかを『縦断的アプローチ』により分析・考察する。

2. 調査方法

(1) 調査項目

大きく集団特性〔所属運動部、所属部内小集団（ブロック）〕、部員特性〔学年、選手レベル、競技戦績、指導者から受ける影響〕、目標設定〔部の目標、個人の目標〕、モラル、マチュリティ、リーダーシップ、満足度の観点から設定した。本研究の中心となる「モラル」は、表1に示すように先行研究である鶴山らの4因子12項目を用いた。

(2) 調査対象

日本女子体育大学の代表的な、伝統ある2つの運動部（A部、B部）の部員を対象に行った。なおA部は一昨年不覚にも創部以来初めて2部に落ち、昨シーズンの活躍で入れ替え戦によりすぐに1部に昇格したチームである。B部はこれまでに全日本インカレで3度優勝しているものの、ここ数年成績がやや低迷しており、次シーズンから新コーチによる新体制となることが決まっている。

(3) 調査期間

2003年8月（昨シーズン前）、2003年12月（昨シーズン

表1 「モラル」の因子構造

変数	アイテム
第1因子 <F1>	一体感
1	部内の上級生と下級生の気持ちが合っている
2	部の目標達成のために部員全員が頑張っている
第2因子 <F2>	目標達成
3	私は部の目標達成のために頑張っている
4	部の目標と個人的な目標が一致している
5	部の目標が達成されやすい
第3因子 <F3>	人間関係
6	部全体としてまとまっていると思う
8	部内でお互いの意見を出し合っている
7	現在の部の運営の仕方を部員が支持している
第4因子 <F4>	合理性
9	部の不平・苦情がうまく取り上げられている
10	部の練習計画が能率的に行われている
第5因子 <F5>	向上性
11	試合に出れる可能性は将来ある程度ある
12	部における技術の指導がうまくなされている

鶴山博之, 畑攻, 加藤昭, 渡部誠, 武田一 (1994)
「モラルから見た陸上競技部のマネジメントに関する基礎的研究」

陸上競技紀要 Vol 7

ン後), 2004年8月(今シーズン前), 2004年12月(今シーズン後)の4回調査を実施した。

III. 結 果

1. 調査対象運動部員の基本特性

表2に示すとおり, A部, B部ともに競技レベル別に部内小集団に分かれており, A1ブロック, A2ブロック, A3ブロック, B1ブロック, B2ブロックで構成されている。選手レベルの比率は, ベンチに入れる(登録される)人数が限られているため, 一般選手の割合が高くなっている。また, リーダーから受ける影響については「強く受ける」, 「まあ受ける」, 「受ける」と答えた部員がどの時期においても85%を超えており, リーダーの影響力は大きい結果を示している。

2. 目標設定

表3・図1, 表4・図2は, 昨シーズンの成績を踏まえて, 今シーズンの目標(部の目標と個人の目標)について示したものである。昨シーズンの活躍で1部

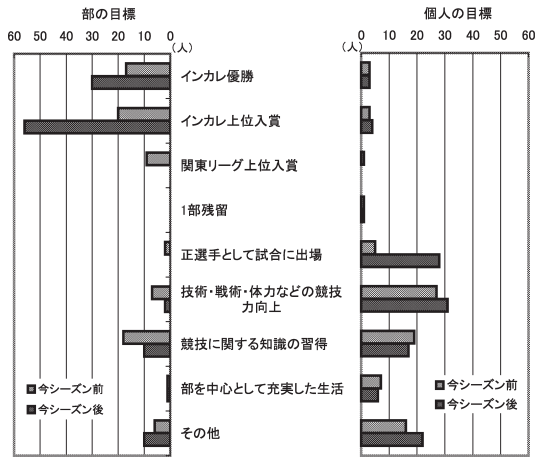
昇格したA部では「インカレ優勝」, 「インカレ上位入賞」という部の目標を多くの部員が掲げ, 部員にとって比較的現実的な目標として捉えている。個人の目標としては「技術・戦術・体力などの競技力向上」が最も多く, スポーツ集団の一員として総合的な競技力向上を目指していることを示している。一方B部では, 3度のインカレ優勝経験があるものの, やや成績が低迷している昨今, 部の目標として「インカレ優勝」という高い目標を掲げているものの, 目標が十分に機能していないことを示している。個人の目標としては「正選手として試合に出場」を目標として掲げている部員が多い結果であった。

3. 「モラル」項目に対する基礎的反応

図3・図4は, シーズンごとにモラル12項目の基本統計を示したものである。A部においてどの時期にも高い値を示した項目は「部の目標達成のために部員全員が頑張っている」, 「私は部の目標達成のために頑張っている」であった。B部においてどの時期にも高い値を示した項目は「私は部の目標達成のために頑

表2 調査対象部員の基本特性

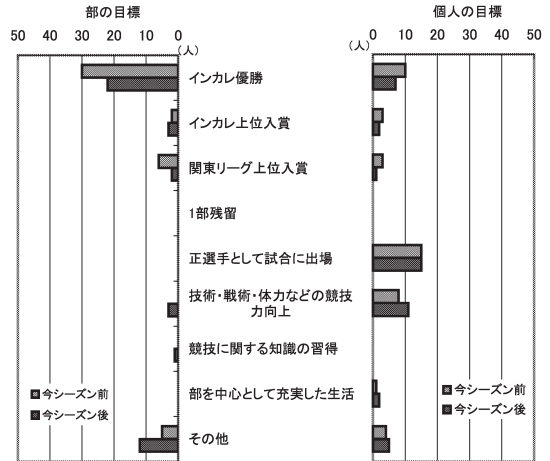
<A部>	昨シーズン前	昨シーズン後	今シーズン前	今シーズン後	<B部>	昨シーズン前	昨シーズン後	今シーズン前	今シーズン後
	N=95 (%)	N=113 (%)	N=84 (%)	N=116 (%)		N=45 (%)	N=48 (%)	N=48 (%)	N=46 (%)
(ブロック)					(ブロック)				
A1ブロック	21(22.1)	22(19.5)	15(17.9)	22(19.0)	B1ブロック	26(57.8)	29(60.4)	33(68.8)	22(47.8)
A2ブロック	44(46.3)	38(33.6)	26(31.0)	48(41.4)	B2ブロック	19(42.2)	19(39.6)	15(31.3)	24(52.2)
A3ブロック	30(31.6)	53(46.9)	43(51.2)	46(40.0)	(学年)				
(学年)					1年生	12(26.7)	15(31.3)	10(20.8)	11(23.9)
1年生	36(37.9)	42(37.2)	17(20.2)	31(26.7)	2年生	15(33.3)	15(31.3)	14(31.1)	12(26.1)
2年生	15(15.8)	15(13.3)	23(27.4)	33(28.4)	3年生	9(20.0)	9(18.8)	16(33.3)	16(34.8)
3年生	21(22.1)	29(25.7)	16(19.0)	22(19.0)	4年生	9(20.0)	9(18.8)	7(14.6)	7(15.2)
4年生	23(24.2)	27(23.9)	28(33.3)	30(25.9)	(選手)				
(選手)					正選手	6(13.3)	14(31.1)	13(27.1)	11(23.9)
正選手	5(5.3)	4(3.5)	2(2.4)	5(4.3)	補欠選手	6(13.3)	11(22.9)	7(14.6)	8(17.3)
補欠選手	5(5.3)	10(8.8)	7(8.3)	8(6.9)	一般選手	29(64.4)	20(41.7)	25(52.1)	22(47.8)
一般選手	55(57.9)	64(56.6)	32(38.1)	67(57.8)	スタッフ			0	4(8.7)
スタッフ			14(16.7)	11(9.5)	(影響)				
(影響)					強く受ける	9(20.0)	11(22.9)	14(31.1)	13(28.3)
強く受ける	24(25.3)	36(31.9)	27(32.1)	33(28.4)	まあ受ける	21(46.7)	18(37.5)	18(37.5)	20(43.5)
まあ受ける	42(44.2)	43(38.1)	38(45.2)	52(44.8)	受ける	10(22.2)	12(25.0)	8(16.7)	10(21.7)
受ける	19(20.0)	26(23.0)	13(15.5)	21(18.1)	あまり受けない	3(6.7)	5(10.4)	5(10.4)	3(6.5)
あまり受けない	6(6.3)	3(2.7)	4(4.8)	5(4.3)	全く受けない	1(2.2)	0	1(2.1)	0
全く受けない	2(2.1)	0	0	0					



※今シーズン前、今シーズン後調査

表3・図1 A部における「目標設定」

	部の目標		個人の目標	
	今シーズン前	今シーズン後	今シーズン前	今シーズン後
インカレ優勝	17	30	3	3
インカレ上位入賞	20	56	3	4
関東リーグ上位入賞	9	0	1	0
1部残留	0	0	1	1
正選手として試合に出場	2	0	5	28
技術・戦術・体力などの競技力向上	7	2	27	31
競技に関する知識の習得	18	10	19	17
部を中心として充実した生活	1	1	7	6
その他	6	10	16	22



※今シーズン前、今シーズン後調査

表4・図2 B部における「目標設定」

	部の目標		個人の目標	
	今シーズン前	今シーズン後	今シーズン前	今シーズン後
インカレ優勝	30	22	10	7
インカレ上位入賞	2	3	3	2
関東リーグ上位入賞	6	2	3	1
1部残留	0	0	0	0
正選手として試合に出場	0	0	15	15
技術・戦術・体力などの競技力向上	0	3	8	11
競技に関する知識の習得	0	1	0	0
部を中心として充実した生活	0	0	1	2
その他	5	12	4	5

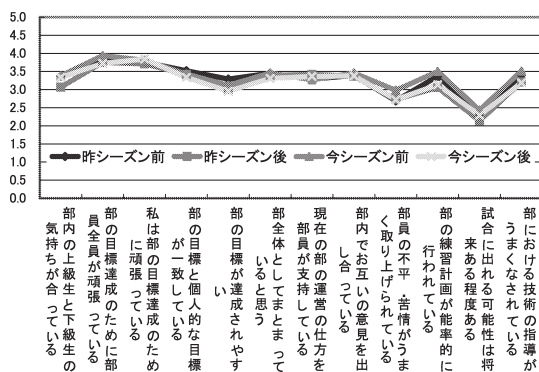


図3 モラル項目の基本統計 (A部)

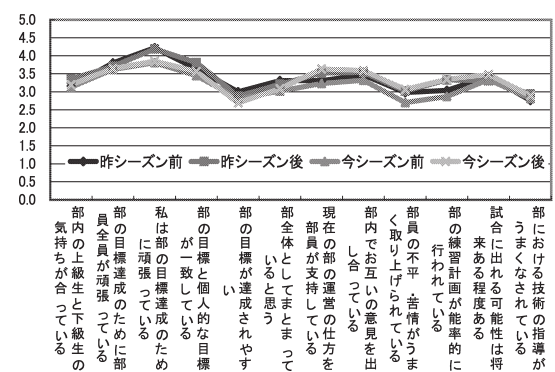


図4 モラル項目の基本統計 (B部)

張っている」であり、値の低い項目は「部の目標が達成されやすい」、「部の不平・苦情がうまく取り上げられている」であった。

A部B部ともに「部の目標達成のために部員全員が

頑張っている」、「部の練習計画が能率的に行われている」の項目が高い値を、「部内の上級生と下級生の気持ち合っている」、「部員の不平・苦情がうまく取り上げられている」の項目が低い値を示している一方、「試

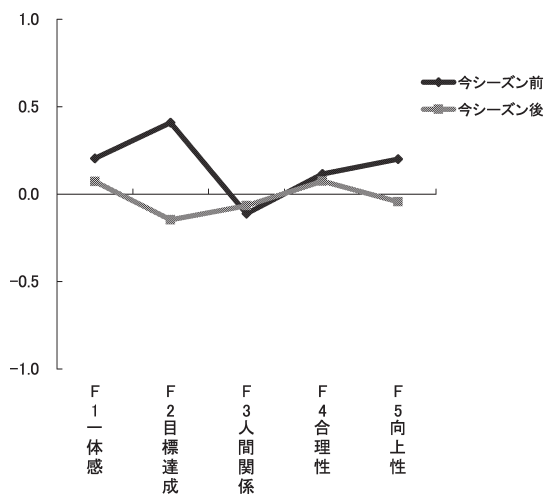
合に出れる可能性は将来ある程度ある」,「部における技術の指導がうまくなされている」の項目は逆の反応を示しており,部によって特徴的な結果であった。

4. 時間の経過によるモラル因子スコアの変容

シーズンを通した時間の経過の中で,モラル機能が変容するのか,またその変容がどのような意味を持つのかを検討するために,モラル因子のスコア比較を行った。

(1) 目標設定における因子スコア比較

図・表5は,A部において「インカレ優勝」を部の目標に掲げた部員のモラルを,今シーズンを通して比較したものである。その結果,チーム状況が安定している今シーズン,比較的現実的な目標として部員に捉えられているために有意な変化が見られない結果であった。一方図・表6に示すように,成績低迷中の昨今ではあるが,ほとんどの部員が「インカレ優勝」という目標に掲げたB部において「F5向上性」が有意に



図・表5 A部の目標:「インカレ優勝」
今シーズン前→今シーズン後

FACTOR	今シーズン前 N=17		今シーズン後 N=30		F 値
	M	SD	M	SD	
F1 一体感	0.205	0.783	0.072	1.094	5.364
F2 目標達成	0.409	1.243	-0.146	1.216	2.130
F3 人間関係	-0.112	1.361	-0.065	1.295	75.836
F4 合理性	0.115	1.252	0.075	1.126	82.793
F5 向上性	0.201	0.958	-0.044	0.937	0.588

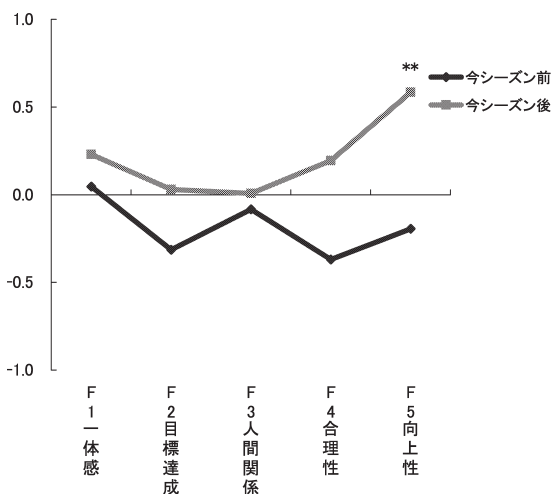
上昇した。

(2) 部内小集団における因子スコア比較

図・表7に示すように,A1ブロックにおいて昨シーズン前から昨シーズン後にかけて「F2目標達成」が有意に低下した。今シーズン前から今シーズン後にかけては有意な変化は見られなかった。実際に試合で活躍し,1部昇格という目標を達成したA1ブロックにおいては「もっと高い目標に向かってやってみよう」という気持ちの向上がみられると考えたが,それとは異なる結果であった。

図・表8は,A2ブロックにおいてスコア比較した結果である。昨シーズン後から今シーズン前において「F4合理性」,「F5向上性」が有意に上昇した。一方,今シーズン前から今シーズン後においてはすべての因子が有意に低下した。

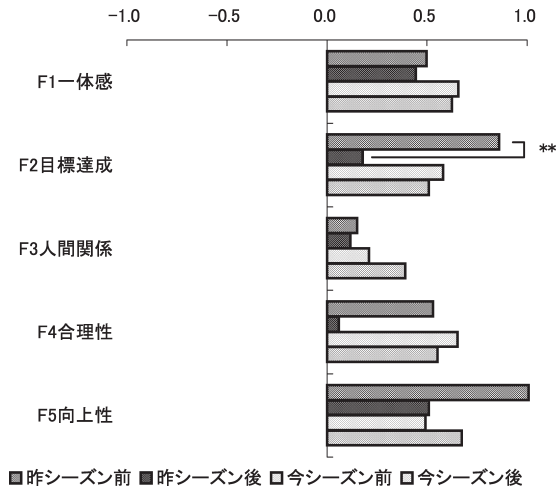
同じく図・表9はB1ブロックにおいてスコア比較した結果である。昨シーズン前から昨シーズン後において「F1一体感」が有意に上昇し,昨シーズン後から今シーズン前にかけて「F4合理性」,「F5向上性」が



図・表6 B部の目標:「インカレ優勝」
今シーズン前→今シーズン後

**P<0.01

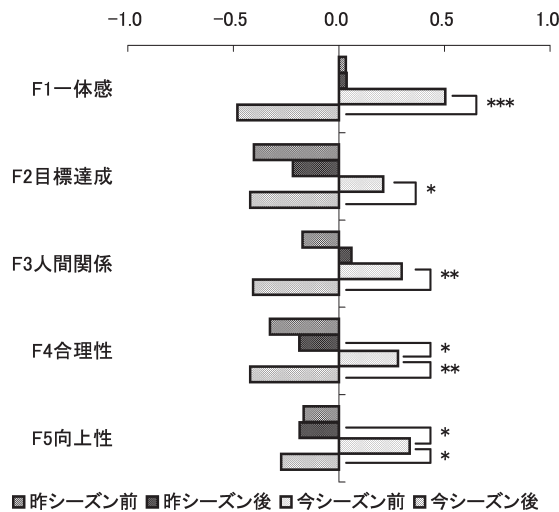
FACTOR	今シーズン前 N=30		今シーズン後 N=22		F 値
	M	SD	M	SD	
F1 一体感	0.046	0.802	0.230	0.736	1.453
F2 目標達成	-0.314	0.823	0.029	0.865	2.030
F3 人間関係	-0.083	0.939	0.007	0.536	6.375
F4 合理性	-0.370	1.164	0.195	0.719	3.894
F5 向上性	-0.195	1.175	0.585	0.719	7.314**



図・表7 時間の経過にともなう変容 (A1ブロック)

**P<0.01

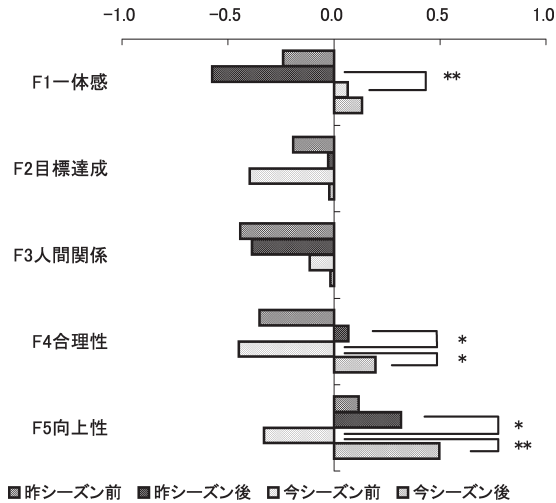
FACTOR	昨シーズン前 N=21		昨今シーズン後 N=22		今シーズン前 N=15		今シーズン後 N=22	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
F1 一体感	0.497	0.684	0.443	0.879	0.656	0.8581	0.624	0.699
F2 目標達成	0.861	0.652	0.178	0.641	0.581	0.6068	0.509	0.720
F3 人間関係	0.150	1.076	0.118	0.907	0.210	0.8323	0.391	0.863
F4 合理性	0.529	0.687	0.059	1.163	0.653	0.807	0.551	0.769
F5 向上性	1.008	0.789	0.509	0.986	0.492	0.7619	0.673	1.069



図・表8 時間の経過にともなう変容 (A2ブロック)

***P<0.001 **P<0.01 *P<0.05

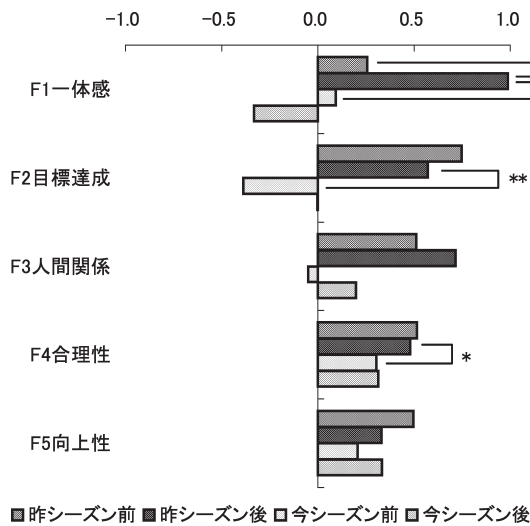
FACTOR	昨シーズン前 N=44		昨今シーズン後 N=38		今シーズン前 N=26		今シーズン後 N=48	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
F1 一体感	0.032	0.812	0.037	0.983	0.503	0.897	-0.482	1.026
F2 目標達成	-0.403	0.954	-0.218	0.969	0.209	0.938	-0.420	1.031
F3 人間関係	-0.172	0.988	0.059	0.795	0.296	0.666	-0.407	1.155
F4 合理性	-0.327	1.065	-0.189	0.885	0.280	0.856	-0.420	1.028
F5 向上性	-0.167	1.092	-0.186	0.891	0.334	1.085	-0.274	0.869



図・表9 時間の経過にともなう変容 (B1ブロック)

**P<0.01 *P<0.05

FACTOR	昨シーズン前 N=26		昨今シーズン後 N=29		今シーズン前 N=32		今シーズン後 N=22	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
F1 一体感	-0.241	0.862	-0.576	0.951	0.065	0.822	0.131	0.744
F2 目標達成	-0.191	0.811	-0.028	0.846	-0.398	0.830	-0.022	0.820
F3 人間関係	-0.441	1.265	-0.387	0.967	-0.114	0.883	-0.017	0.573
F4 合理性	-0.352	1.134	0.068	0.846	-0.449	1.076	0.195	0.634
F5 向上性	0.115	0.743	0.317	0.773	-0.330	1.170	0.496	0.641



図・表10 時間の経過にともなう変容 (B2ブロック)

**P<0.01 *P<0.05

FACTOR	昨シーズン前 N=19		昨今シーズン後 N=19		今シーズン前 N=15		今シーズン後 N=24	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
F1 一体感	0.256	1.040	0.989	0.792	0.093	0.712	-0.331	0.933
F2 目標達成	0.747	0.851	0.571	0.751	-0.388	0.956	-0.003	1.019
F3 人間関係	0.510	0.850	0.717	0.944	-0.050	0.726	0.199	0.665
F4 合理性	0.516	0.809	0.481	0.788	0.305	0.578	0.314	0.799
F5 向上性	0.497	0.751	0.331	0.736	0.206	0.588	0.334	0.902

有意に低下した。

図・表10は B2 ブロックにおいてスコア比較した結果である。昨シーズン前から昨シーズン後において「F1 一体感」が有意に上昇し、昨シーズン後から今シーズン前にかけて「F1 一体感」、「F2 目標達成」、「F4 合理性」が有意に低下した。

IV. 考 察

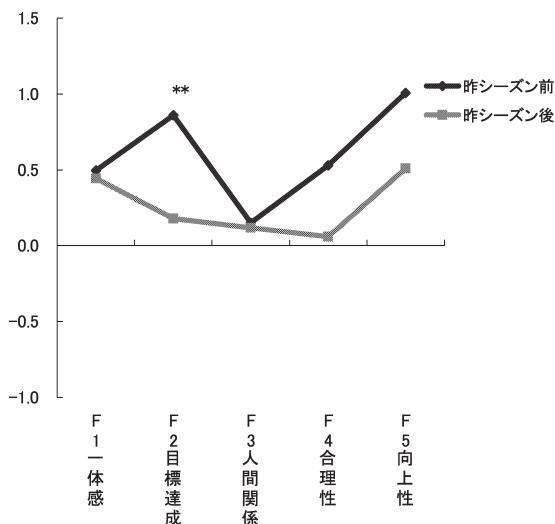
1. 時間の経過によるモラルの特徴的な変容

特定の競技スポーツ集団におけるモラル因子のスコア比較の結果から、時間の経過にともなう特徴的な変容が明らかとなった。

図・表11, 図・表12に示すように、A 部においてブロックごとに特徴的な変容が見られた。昨シーズン後において実際に試合に出て活躍した A1 ブロックでは、1部昇格という目標を達成したことで「ホッ」、「やれやれ」という達成感・安堵感から「F2 目標達成」の

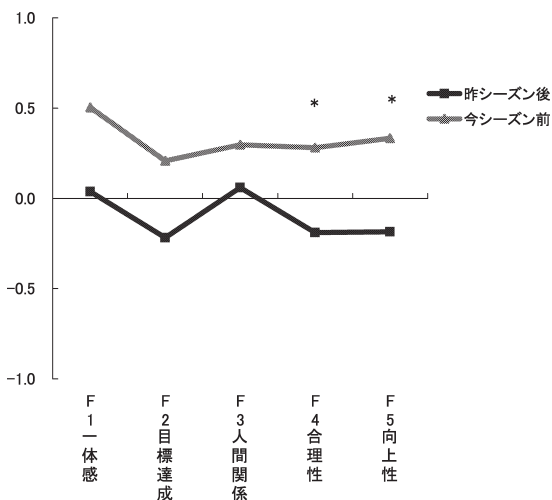
因子が有意に低下した。一方今シーズン前から今シーズン後にかけて有意な変化が見られなかったことは、シーズンを終えて「やれやれ」という安堵感よりも、もう2部には降格できないという緊張感が保たれているからだといえる。同じ部であっても、A1 ブロックの活躍を目の当たりにした A2 ブロックにおいて今シーズン前に上昇した因子があることは、昨シーズンの A1 ブロックの活躍を目の当たりにし、一緒になって歓喜したことで、シーズンを終えて休むどころか次のシーズンに向けて積極的に取り組む姿勢になっているものと考えられる。つまり、レギュラーブロックの活躍・成果が、直接試合に出場する選手ではない A2 ブロックに大きな影響を与えることである。

B 部においては、ここ数年成績が低迷しているにも関わらず、「インカレ優勝」という高い目標を掲げたことで、昨シーズン前から昨シーズン後にかけてチーム一丸となって頑張ろうという一体感は高まるものの、次のシーズンに向けて動き出す時期（今シーズン前）に練習の効率に不満が出る、向上心が低いという結果



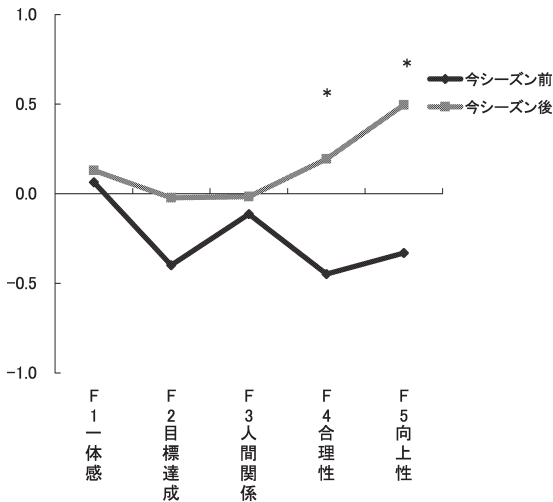
図・表11 A1 ブロック 昨シーズン前→昨シーズン後
**P<0.01

FACTOR	昨シーズン前 N=21		昨シーズン後 N=22		F 値
	M	SD	M	SD	
F1 一体感	0.497	0.684	0.443	0.879	20.705
F2 目標達成	0.861	0.652	0.178	0.641	11.436**
F3 人間関係	0.150	1.076	0.118	0.907	89.015
F4 合理性	0.529	0.687	0.059	1.163	2.445
F5 向上性	1.008	0.789	0.509	0.986	3.175



図・表12 A2 ブロック 昨シーズン後→今シーズン前
*P<0.05

FACTOR	昨シーズン後 N=38		今シーズン前 N=26		F 値
	M	SD	M	SD	
F1 一体感	0.037	0.983	0.503	0.897	3.615
F2 目標達成	-0.218	0.969	0.209	0.938	2.982
F3 人間関係	0.059	0.795	0.296	0.666	1.521
F4 合理性	-0.189	0.885	0.280	0.856	4.316*
F5 向上性	-0.186	0.891	0.334	1.085	4.254*



図・表13 B1ブロック 今シーズン前→今シーズン後
** P<0.01 * P<0.05

FACTOR	今シーズン前 N=32		今シーズン後 N=22		F 値
	M	SD	M	SD	
F1 一体感	0.065	0.822	0.131	0.744	11.303
F2 目標達成	-0.398	0.830	-0.022	0.820	2.610
F3 人間関係	-0.114	0.883	-0.017	0.573	5.064
F4 合理性	-0.449	1.076	0.195	0.634	6.135*
F5 向上性	-0.330	1.170	0.496	0.641	8.756**

であった。つまり、チームの実力に合った的確な目標設定がなされなければ、目標に対する積極的意義が感じられずモラルは低下しているものと考えられる。しかし図・表13に示すように、B1ブロックにおいて、今シーズン前から今シーズン後にかけて有意に上昇した因子があることは、次シーズンに新たなコーチを向かえる期待感から上昇したものと考えられる。

以上のことから、同じ部であっても部内小集団それぞれの置かれた立場が異なり、これまで多くの横断的アプローチが示してきた「モラルが高ければ強く、あるいは強ければ高い」という単純な仕組みではなく、本研究の『縦断的アプローチ』によって部の状況に応じたモラルの特徴的な変容が示されたものと考えられる。またこの変容は、チームの成績・戦績、的確な目標設定、チームスタッフなどの「チーム状況」が大きく影響することも明確に示している。

2. 競技スポーツ集団におけるリーダーのアプローチのポイント

本研究において、昨シーズン前から昨シーズン後、昨シーズン後から今シーズン前、今シーズン前から今シーズン後という比較的短期間において因子スコアの変容が見られ、これらの変容は「チーム状況」によって変容していることが示された。またA1・B1のようなレギュラー集団だけでなくA2・B2の一般集団においても変容が見られたことは、勝つことを最大の目的とする競技スポーツ集団において、チーム状況に応じた個々の部内小集団（ブロック）へのコーチ・リーダーのきめ細かな対応、流動的なアプローチがチームの活性化・強化、さらには勝つための競技力向上につながることを示された。

V. まとめ

本研究は、競技スポーツ集団、特に伝統的なチームスポーツ系運動部に焦点を当て、対象集団を取り巻く環境や状況の変化にともない、組織変数が年度およびシーズン前後でどのように変容していくのか、またその変容がどのような意味を持つのかを『縦断的に』分析・考察した。

その結果、シーズンを通した因子スコア比較の結果から、時間の経過にともなうモラル機能の変容が明らかとなった。レギュラーブロックだけでなく実際に試合に出ていないジュニアブロックにおいても変容が見られたことは、部の活性化・チームの強化のためにはそれぞれの部内小集団（ブロック）に対して、時間の経過、部の成熟をふまえた的確な目標設定、きめ細かなコーチ・リーダーの働きかけの必要性が示された。

これらの結果から、特定の競技スポーツ集団を『縦断的に』分析・考察することで、従来の横断的研究ではみられなかったモラル機能の変容が明らかとなり、まさに「生きもの」としての変化する競技スポーツ集団の組織的・人間的な状況を明確に示したものと考える。このような研究の継続が「計画的なチームづくり」、「総合的なチームマネジメント」につながる可能性を示したものと考える。

参考文献

- 1) Chelladurai, P (1993): LEADERSHIP. HANDBOOK OF RESEARCH ON PSYCHOLOGY MACMILLAN PUBLISHING COMPANY: 647-671

- 2) Chelladurai. P (1993): Leadership in sports. International journal of Sports psychology 21: 328-354
- 3) 藤田雅文 (1980):「競技的運動クラブのマネジメント」日本体育学会第31大会号 P472
- 4) 藤田雅文 (1981):「競技的運動クラブのマネジメント第2報」日本体育学会第32大会号 P470
- 5) 畑 攻, 柴田雅貴, 塚本正仁, 杉山歌奈子 (2003):「チームスポーツ系運動部におけるコーチのリーダーシップに関する基礎的研究」日本女子体育大学紀要第34巻
- 6) P. ハーシー&k. ブランチャード (1978):「行動科学の展開～人的資源の活用」日本生産本部
- 7) 池田瑠里 (2005):「競技スポーツ集団の組織論的研究」日本女子体育大学大学院修士論文
- 8) 加藤 昭 (1998):「能力アップのための記録・能力分析(畑 攻編, 体育の学習指導と経営に生きるパソコン)」ニチブン
- 9) 三隅ニ不ニ (1978):「リーダーシップ行動の科学」有斐閣
- 10) 永谷 稔, 永田靖章, 市野聖治, 築瀬 歩(1996):「競技スポーツ集団における活動意欲を規定する目標による管理に関する研究」愛知教育大学体育教室研究紀要 No. 21 P25-30
- 11) 野崎武司, 植村典昭(1989):「リーダーの構造づくり行動がスポーツチームに及ぼす効果」体育・スポーツ経営学研究 第6巻第1号
- 12) 下中邦彦 (1977):「心理学事典」平凡社 P242-252
- 13) 杉山歌奈子, 畑 攻, 鶴山博之(1998):「Chelladuraiの LEADERSHIP SCALE FOR SPORTS による大学女子運動部のマネジメント」日本体育学会大会号第49回
- 14) 杉山歌奈子 (1999):「競技スポーツ集団におけるリーダーシップに関する研究」日本女子体育大学大学院修士論文
- 論文
- 15) 杉山歌奈子, 畑 攻, 渡部 誠, 鶴山博之 (1999):「競技スポーツ集団におけるリーダー行動の固有性・個別性に関する研究」日本体育学会大会号第50回 P368
- 16) 杉山歌奈子, 畑 攻, 渡部 誠, 鶴山博之 (2000):「競技スポーツ集団における運動部員のリーダーシップ反応の年度別比較」日本体育学会大会号第51回 P283
- 17) 竹村 昭, 丹羽たか昭(1968):「運動部のモラル研究(1)ーモラル調査の作成ー」体育学研究第12巻第2号
- 18) 鶴山博之, 畑 攻, 渡部 誠, 武田 一(1994):「モラルから見た陸上競技部のマネジメントに関する基礎的研究」陸上競技紀要 Vol. 7
- 19) 鶴山博之, 畑 攻, 渡部 誠, 武田 一(1996):「リーダーシップから見た陸上競技部のマネジメントに関する基礎的研究」陸上競技紀要 Vol. 9
- 20) 鶴山博之, 畑 攻, 渡部 誠, 杉山歌奈子 (2001):「運動部の組織特性と組織変数に関する研究ーモラル・リーダーシップ・マチュリティの関連性に着目してー」日本体育学会大会号第51回 P284
- 21) 植田恭史, 高野 進 (2001):「コーチング研究〔I〕ー学生アスリートのモチベーションー」東海大学紀要 体育学部第31号 P 1-6
- 22) 渡部 誠, 杉山歌奈子, 畑 攻 (2001):「陸上競技運動部員の「職務満足」から見た指導に関する研究」陸上競技紀要 Vol. 14

(平成17年9月21日受付)
(平成17年11月24日受理)